

南山宗教文化研究所元所長ヤン・ヴァン・ブラフト師が去る4月12日に逝去したニュースは多くの人を驚かせたであろう。しかしながら、彼に近い人々は、彼が一昨年から不治の病にかかっていたことを知っていて、彼のことを心配していたのである。病を乗り越えるために、京都を去り、姫路淳心会レジデンスで静養しはじめたが、意外にも、転居後、あまり日を置かず亡くなったのであった。

ヴァン・ブラフト先生、ヴァン・ブラフト博士、ヴァン・ブラフト所長、ヴァン・ブラフト神父、などなど。彼にはさまざまな称号があった。その中でどれが彼にとって最も価値ある呼び方であったか、われわれ皆にとって考えさせられることであったかもしれないが、ヴァン・ブラフト師自身にとって果たして問題であったのだろうか。

彼の人生を振り返って見ると、互いに異なっていたこれらのさまざまな称号・呼び方は確かにヴァン・ブラフト師の幅広い活動ぶりを象徴していたにちがいない。しかしながら、これら互いに異なっていた活躍分野との間に決して対立あるいは矛盾はなく、かえってそのすべてが見事に調和して、この調和こそ彼の個性、彼の人格の最も基本的な特徴ではなかったかと思われる。

ヤン・ヴァン・ブラフト師は1928年にベルギーに生まれ、19歳のときカトリック修道会である淳心会に入会し、1952年に司祭に叙階された。その後、ベルギーのルーヴェン大学で哲学を勉強し、数年間淳心会の大神学院で哲学を教えたりした上で、博士号を取得した直後、1961年の末にはじめて日本の地を踏んだのである。その時から日本の文化における宗教哲学思想、とりわけ仏教思想に深い関心を示し、カトリック教

ヤン・ヴァン・ブラフト元所長

を偲んで

(一九二八～二〇〇七)

ヤン・スイングドー
Jan SWYNGEDOUW

会社司牧に携わる短い期間の後、京都大学で仏教に関する知識を深めはじめた。その時以来ほぼ40年が過ぎたが、その大部分は、日本においてのみならず、海外の多くの大学においても客員教授として教鞭を執るとともに、名古屋の南山大学教授、とりわけ南山宗教文化研究所長を長年務めた。彼の活躍ぶりは著しいものであったが、紙面の都合でここでもっと詳しく述べることはできない。ヴァン・ブラフト師はそのすべてにおいて主として諸宗教対話、とくに仏教とキリスト教の対話を進めることを目指していたと言っても過言ではなからう。このように、彼は第二バチカン公会議の時からキリスト教の世界にますます盛んになってきた姿勢に則って、日本でも対話の動きに大きく貢献し、先頭に立って繰り返し繰り返し諸宗教対話がキリスト信者にとってどれほど重大な課題であるかを強調したのである。さらに、彼のこの熱心さは学問的な研究に限らず、とくに日本の仏教に対する彼の理解や尊敬を具体的な行動を以て実践した。その中で特記すべきことは、「東西靈性交流」企画への彼の協力および参加である。日本の僧侶などをヨーロッパのカトリック修道院へ連れて行ったり、あるいはヨーロッパの修道士を日本に招き、お寺で仏教の瞑想を体験させたりするこの交流が相互の理解や尊敬を大きく深めたことは言うまでもない。ローマの教皇にもその意味が認められ、その結果ヴァン・ブラフト師が5年間教皇庁諸宗教対話評議会の諮問委員を務めたことも決して驚くべきではない。彼を日本における諸宗教対話の先駆者の一人と呼んでも過言ではない。

20年間以上ヤン・ヴァン・ブラフト師と一緒に生活し、いくらかちがった立場で諸宗教対話に携わってきた筆者であるが、当

然彼の人格のいろいろな側面を見ることができた。

先に指摘したように、彼のパーソナリティの中には互いに異なっていた様々な側面が見事に調和していたように見えた。ところで、この調和は一体どこから来たのだろうか。それはある意味で生れ付きのような特徴であったのか、それとも人生における様々な体験を通して獲得したものであったのか。つまり、その秘訣をどこに探したらよいか、という問題がある。

数年前、ヴァン・ブラフト師は友人のモマス神父と共同して評判になった本を出した。テーマは、ヨーロッパの中世期に生きた、著者たちの故郷であるフランダース出身の神秘家ヤン・ヴァン・ルースブルックと、日本の仏教における神秘思想の比較研究であった。神秘思想に関するこの比較研究がヴァン・ブラフト師にとって非常に大きな意味をもっていたことは、以上の問題を解明しようとした場合は重要な手掛かりになると思われる。神秘思想への彼の深い関心は単なる学問的なものであったのか、それとも彼のパーソナリティおよび人生観と密接な関連を持つものであったのか。

去年のクリスマスの頃、ヴァン・ブラフト師が京都を去って姫路に引っ越した時に、著者は少し手伝うことができた。彼の持ち物と言え、当然のことながら、主として本であった。私が驚いたのはやはり神秘思想に関する書物が非常に多いということであった。そして、もう少しくわしくこれらの本を見ると、その中に自分が大切と思った箇所を自分なりの特有のやり方で指摘していたことを発見した。それをところどころ読んだときに、ヴァン・ブラフト師にとって神秘思想は、やはり単なる学問的研究対象であることをはるかに越えて自分の人

生を支える大きな力になっていたということがますます分かったのである。つまり、彼を神秘家と呼ぶことは確かに言い過ぎではあろうが、にも拘らず神との一致、神との密接なつながりを求める心それ自体がいかに彼の人格の核心的な要因であったかを改めて感じさせられたわけである。

神秘思想に対する関心と関連して、彼のパーソナリティにおけるさまざまな側面を調和的に統合しようとする努力の中に、もう一つ浮かんでくる問題があった。それはとくに諸宗教対話に携わったときに出た問題であると思われる。仏教学者であると同時にキリスト信者でもあるヴァン・ブラフト師は、この二つの要素をどういうふうに結び付けることができるかという問題に長年にわたって取り組んだようである。そしてそれは諸宗教対話に携わるときの自分の個人的な姿勢だけではなく、諸宗教対話に対する、彼が長年の間に所長を務めた南山宗教文化研究所そのものの姿勢・方針との問題でもあった。

ヴァン・ブラフト師が日本に来たのは、カトリック宣教師としてであった。前述のとおり、哲学博士号を取得した人間であって、当然に仏教思想に興味をもっていたのであるが、その具体的な形はまず仏教思想、とりわけ仏教のいわゆる京都派との出会いになっていた。これもまた当然のことかもしれないが、この出会いは主としてかなり学問的な性格をもっていたのであり、この立場に立って彼が例えば西谷啓治先生などの著書を英訳してすぐれた仏教学者として認められるようになったのである。ところが、彼が晩年に明らかにしたように、いわゆる純粋な学問的なアプローチに対して一種の疑問を抱きはじめた。学問上の出会いは確かに重要ではあるが、それがより宗教

的なレベルへ発展しないと足りない、というふうになります考えたのである。「東西靈性交渉」への彼の参加はこういう意味をも含んだものと言っても過言ではないだろう。そしてこの具体的な宗教対話を行うと同時に、ヴァン・ブラフト師——ヴァン・ブラフト神父と言うべきか——はますますいわゆる諸宗教の神学に関心を示し、それをテーマにして研究論文を記しはじめた。

「ヴァン・ブラフト師の心の歩み」というような表現を使えば、今の所まだ早計かもしれないが、彼の考え方や具体的な行動に展開があったことを否定できない。私見によれば、この展開は、理性にもとづいた哲学的なアプローチと信仰にもとづいた神学的なアプローチとの二元論を乗り越えようとする努力といくらか関係がある気がする。前述した「相異なった要因の調和的統合」のもう一つの具体例であろうか。興味深いことには、この展開は逆戻りに似たような一要因をも含んでいると思われる。靈性交渉や神秘思想への彼の関心が次第に増したことは確かに新しい展開ではあったが、若い時分に抱いた宗教的な理想を思い出させる側面を示していると言えよう。

いろいろな分野での先駆者について、晩年に入って保守的になったという、少々批判を含んでいるような発言が時々聞こえる。ヴァン・ブラフト師についてもそうである。やはり批判であるかどうかは別にして、あらゆる諸宗教対話の形態において、参加者の宗教心が今問われていることは事実である。キリスト教世界において諸宗教対話が本格的な営みになりはじめたのはおよそ40年前のことである。それは新しい動きだけあって、当然のことながらその性格についての深い反省はまだあまりなかったと言えよう。宗教界を歩き回って相手を探しながら

ら、互いに親切にしようというふうに、それをある意味で「対話の観光的時期」と呼ぶことができよう。この時期は今は終わった。しかしその結果、より根本的な問いが提起されるようになってきた。対話に携わる人たちは自分の信仰をどう解釈しているのか、この解釈は対話の性格にどのような影響を及ぼしているのか、などなど。ヴァン・ブラフト師は対話の相手、とりわけ日本の仏教を代表する相手に対して親切さを怠ったことは決してなかった。しかしそれと同時に、やはり調和の原則をあくまでも守りながら、自分の信仰と相手の信仰を諸宗教対話における欠くべからざる要因として強

調するようになった。

ヤン・ヴァン・ブラフト師が逝去したのは、キリスト教の最も中心的な祭りである御復活祭の直後である。永遠の生命を信じる彼は、人の業績にも一種の永遠性があると信じたに違いない。自分の業績をどう考えたか、それをあまり気にしなかったかもしれない。そうであれば、この業績を守ることにはわれわれの重要な役割ではないだろうか。

願わくは、ヴァン・ブラフト師が永遠の安息に入ることができますように。

ヤン・スインゲドー
南山大学名誉教授
本研究所元第一種研究所員